

加賀につづいた琳派 宗雪・相説 —宗達と光琳のあいだに—



石川県指定文化財《秋草図屏風》喜多川相説 石川県立美術館蔵
—「加賀につづいた琳派 宗雪・相説」より—

- 特別展示 加賀の蒔絵と刀装具／
歴代藩主の甲冑・陣羽織【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 棚の美と調度／海、波、うらうら【近現代工芸】
- 優品選／優品選・床を飾る【近現代絵画・彫刻】
- 古九谷・再興九谷【古美術】

- 5月の行事予定
- 令和7年度土曜講座のお知らせ（5～9月）
- 学芸室こぼれ話
- 今年度の目玉

企画展(第7～9展示室)

加賀につづいた琳派 宗雪・相説 ―宗達と光琳のあいだに―

主催／石川県立美術館 特別協力／北國新聞社

後援／NHK金沢放送局、MRO北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送

4月26日(土)～5月25日(日) 会期中無休 一部展示替えあり、前期:4月26日(土)～5月9日(金)／後期:5月10日(土)～25日(日)

依屋宗雪は依屋宗達の有力な弟子のひとりとして活躍し、宗達の死後まもなく、寛永19年(1642)までに法橋の位に叙せられました。寛永19年に加賀藩三代前田利常の四女富姫が、八条宮智忠親王に嫁いだ時の記録によると、新たに造営される八条宮家の御殿に、宗雪が障壁画を描いたことが判明します。さらに寛永20年に加賀藩四代光高の発願によって創建された金沢東照宮(現・尾崎神社)に納められた『三十六歌仙額』は、宗達派の特徴を備えており、宗雪が中心となって制作に当たったと考えてよいでしょう。知られざるポスト宗達の絵師、宗雪の加賀藩における活躍をご紹介します。

喜多川相説は依屋宗雪の後継者です。宗雪と同じく法橋に叙され、少なくとも72歳まで長らえました。宗雪の描く草花が、いきいきとしたエネルギーに満ち、桃山時代の豪放な気風を残しているのに対し、相説の草花は繊細で抒情的、「一枚の葉、一輪の花をも」とほしむ気持を筆先によく反映せしめてゐる」と評されます。写実的な草花の描写と墨のにじみを活かした面的な水墨表現とを融合させ、独特の情感を生み出している点が特徴です。制作年代が判明している相説の作品は数少ないですが、今回は水墨表現と画面構成に注目し、相説の画風の展開に沿って紹介します。何を受け継ぎ、何を変えたか、相説の転換をご覧ください。

*水尾比呂志「喜多川相説筆 秋草図屏風」〔国華〕第969号、1974年

【観覧料】

一般1,000円(800円)
大学生800円(600円)
高校生以下無料

※(一)内は65歳以上の方および20名以上の団体

※2階コレクション展観覧料を含む

※身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

【関連行事】

■土曜講座

*参加無料、申込不要

①「宗雪・相説展を深掘り！」

日時.. 5月10日(土) 13時30分～15時

担当.. 中澤菜見子(当館学芸主任)

②「加賀蒔絵を楽しむ」

日時.. 5月17日(土) 13時30分～15時

担当.. 野口明日香(当館学芸主任)

③「『宗雪・相説』昭和の研究史を探る1」

日時.. 5月24日(土) 13時30分～15時

担当.. 村上尚子(当館学芸専門員)

会場はいずれも当館講義室(定員40名、当日先着)

■当館学芸員によるギャラリートーク

*申込不要、要観覧料

日時.. 5月11日(日)・18日(日)・25日(日)

13時30分～(1時間程度)

会場.. 企画展示室

■コラボスイーツ

会期中、館内カフェ「ルミューゼドゥアッシュ KANAZAWA」にて、展覧会をイメージしたコラボスイーツを提供いたします。



石川県指定文化財《群鶴図屏風》依屋宗雪 個人蔵



棚の美と調度

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

前回の美術館だよりでは、古代から近代までの棚の歴史を簡単に紹介してきました。今回は、近代以降の流れと展示作品に注目していきます。

明治時代に入ると、日本政府は世界各国で開催された博覧会に積極的に参加します。明治6年(1873)のウィーン万博では、日本の伝統的な意匠が施された工芸作品が高い評価を得ました。そこで、政府は日本の工芸品輸出による殖産興業をはかり、様々な施策を行います。また、この一環として、日本国内でも、内国勸業博覧会や農展・商工展などの展覧会が開かれました。本展出品の初代池田作美《遠州風彫刻桑材飾棚》は、大正14年(1925)商工省第12回工芸展覧会で三等賞となった作品です。一見すると本作は、桑材の木肌を生かした、素朴な印象です。

が、均整の取れた透かし彫りや見事な金属装飾が施されているため、重厚感のある棚となっています。また、展覧会への出品を通して、全国の塗師や指物師などの職人のなかには、作家意識を持つ人たちも現れ、個性的な作品が生まれました。

さて、戦後になると、今までつくられていた和風な棚は、生活の場から姿を消してしまい、欧米の影響を受けた工業製品の棚が中心となりますが、鑑賞用の伝統工芸として和風の棚は存在し続けます。例えば、大場松魚《平文光輪棚》は、青貝を中心に光の輪が広がっていくような印象的なデザインとなっています。その周りに鳥を象った平文が配されています。

棚の持つ魅力、どうぞお楽しみください。



初代池田作美《遠州風彫刻桑材飾棚》

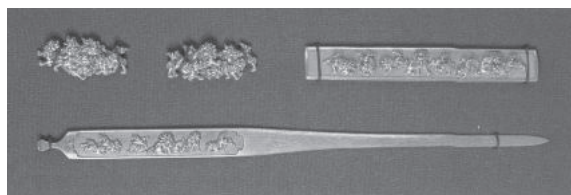
特別展示 加賀の蒔絵と刀装具

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

後藤家は室町時代の初代祐乗以来、装剣金工の宗家としての時の幕府や権力者の御用を勤めてきました。が、なかでも九代程乗(1603～1673)は傑出した技の持ち主のひとりとして知られています。程乗は七代頭乗の子で、名を光昌といい、理兵衛と称しました。始め分家である理兵衛家(父頭乗が宗家を譲った後に興した)を継ぎますが、宗家八代の即乗が早世したため、宗家を継ぐこととなりました。加賀藩より三十人扶持を給せられ、隔年で金沢へ下り、職人の指導に当たりました。技量のみならず、律儀な性格もあって、加賀藩では優遇され、屋敷地を下賜されたと伝わっています。

現存する作品は比較的多く、展示作品のうち「二十五獅子」の三所物と「屋島の弓流し図」の小柄は傑作といわれています。その作風は『装剣奇賞』に「甚だ綺麗にて、品高く、位そなはりて、誰見ても作の物と賞する彫なり、其時代、今より遠からねど、光乗などの風ともいはん、古色あり、少しだがねめ深く、つよくあざやかなり」と評されています。

刀装具以外にも、蒔絵や諸道具の金具も作ったとされ、『牡丹獅子蒔絵硯箱』(金沢市立中村記念美術館蔵)などは、清水九兵衛が蒔絵を施し、蓋表の獅子を程乗が彫金で表したもので、当時の加賀の文化の華やかさを感じさせます。



《廿五匹獅子三所物》後藤程乗

歴代藩主の甲冑・陣羽織

5月31日(土)～6月29日(日) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館では、毎年「百万石まつり」が行われる時期にあわせて、特集展示「歴代藩主の甲冑と陣羽織」を開催します。

江戸時代の甲冑は「当世具足」と呼ばれ、兜・胴・袖だけでなく、籠手・大袖、腿を護る佩楯^{はいだて}、足を護る脛当、頬を護る頬当など、隙間なく体を護るよう工夫がされています。それぞれを組み立てて完成させますが、よく見ると多彩な材料と技法を駆使してつくられていることがわかります。兜や胴には鉄を、籠手や佩楯には珍しい裂地を、草摺や大袖に用いられる漆塗^{しほぬり}には、皴塗^{たてぬり}や叩塗^{たたぬり}といった変塗の技法が用いられるのです。籠手の鎖の細かさや、胴や兜の底に見える細工などから、加賀藩では高度な技術を持った甲冑師がいたことがうかがえます。

浅井勝光という甲冑師が三代利常に招かれ金沢へ下り、その技術を伝えたといえます。浅井は奈良で活躍した春田氏の流れを持つ甲冑師だったことから、その技術を継承した者による作は「春田細工」「春田鍛冶」などと呼ばれました。

六代藩主前田吉徳の甲冑制作に携わったのも二代春田道助を名乗った雲海壽尚です。吉徳の好みに応じて胴・兜・籠手・脛当・佩楯などの使用は決まりましたが、いざ吉徳が胴の試着をすると窮屈だったので、御細工奉行有沢武貞が直すよう命じたといった記録が残っています。制作に至る経緯もわかる貴重な甲冑であるとともに、雲海壽尚の最後の作としても知られています。



《黒塗筋十二間甲冑》6代吉徳所用

優品選

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

日本画は近代の名品を展示します。久保田米僊は、明治の画家たちの結集を図り、京都府画学校の設立に奔走するなど、社会的にも活躍しました。《大楠公・義貞公誠忠之図》は、後醍醐天皇を奉じた楠木正成、新田義貞という二人の武将の軍功を、歴史画に長けた米僊が最も筆力充実したところに描いた作品です。

油彩画分野からは村田省蔵《吉野》を展示します。満開の桜で覆われた奈良・吉野山の風景画です。春霞が立つ、束の間の遠望を太い筆致で描きとめています。村田は当地の宿泊先の古い宿帳に「昭和36年小絲源太郎」とあるのを見て、35年前に師が訪れていたことを知り、「先生に呼ばれてきたようで、感慨一入

だった」と振り返っています。

版画で今回ご紹介している日和崎尊夫は、書籍の挿絵等を印刷するための技術である木口木版を、版画の技法とした最初の作家です。彼は、まったくの独学で木口木版の制作を始め、版面を埋め尽くすように刻んだ、闇に浮かぶ星や花にも例えられた作品は、それまでの木口木版の世界に、新風を吹き込みました。

続いて、彫刻分野では得能節朗《春》をご紹介します。右手の平を上に向け、上方を見てたたくむワンピース姿の女性像。手の平には小鳥がちよこんと乗っています。肩肘を張らない、穏やかで自然な姿は、春の麗らかな日の情景を思わせるようです。



久保田米僊《大楠公・義貞公誠忠之図》(左隻)

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選・床を飾る

5月31日(土)～6月29日(日) 会期中無休

日本画は「床を飾る」と題して、軸装作品を主に展示します。「床」より「床の間」の方が、耳馴染みがあります。「床」は中世に発生し、もともと大陸伝来の軸装絵画を飾る空間でした。「どのような季節に」「どのような場面で」「だれを迎えるのにふさわしいか」と、楽しみながらご覧ください。

第3展示室、油彩画分野では、金地の合戦図屏風を描いた太佐寿一郎《合戦図》にご注目ください。太佐は甲冑をテーマとした作品を制作しており、この作品では合戦図のなかに鎧武者を亡霊のように登場させています。まるで武者が体験した合戦の世界を追想しているかのように、語り部としての存在を強調し、見る者の想像を膨らませます。

同じく第3展示室では版画作品を展示します。日本の版画は、戦後、海外の国際版画展などで数多くの賞を受け、国際的にも美術としての価値が認められました。木版画、銅版画、リトグラフ、シルクスクリーンの4つの版種の技法の確立で、版画の技術と表現の改革が一層進んだ現代版画の作品をご覧ください。

彫刻分野では小特集「神、仏、祈り」と題し神仏や祈りにまつわる作品をご紹介します。田中太郎《音色》は手を口に当てて声を届ける仕草をする木彫像です。仏教の生きる者に対する尊い教えを発している、と田中が語る本作には、自身の信仰する仏教の教えが造形化されています。



田中太郎《音色》

古美術(第2展示室)

古九谷・再興九谷

5月31日(土)～8月17日(日) 会期中無休
※6月30日(月)～7月4日(金)は休室

石川県立美術館にご来館くださる方々が、鑑賞のたのしみとされている作品のひとつが、古九谷のコレクションです。第2展示室では、特集展示の内容に関わらず、古九谷を常に12点紹介していますが、5月31日(土)から始まる「古九谷・再興九谷」の特集展示では、古九谷だけでなく、再興九谷と称される春日山窯・民山窯・吉田屋窯・若杉窯・宮本窯などのそれぞれ特徴のある作品を約40点紹介します。会期は8月17日(日)までと長い特集展示ですが、途中一部の作品の入れ替えも行いますので、何度もじっくりとお楽しみください。

「九谷五彩」といわれるように、九谷焼は、主として黄・緑・紫の三色と、紺青と赤の二色を補彩として用いられることが特徴です。うち、江戸前期の17世紀中

ごろから18世紀はじめに焼かれた九谷焼が、「古九谷」と称されます。そのはじめは、大聖寺藩初代前田利治の命によって九谷の地で焼かれたやきものです。

古九谷は、素地全面を絵の具で塗り埋めた「青手」と、素地に色絵技法で模様を施したものがああります。「色絵」のうち、もともとよく知られるのが《色絵鳳凰図平鉢》です。片足を上げて立ち一声を発する姿ですが、五彩を用いた独自の姿で表されています。色分けして表現された尾羽は美しく、鳳凰の表情は個性に富みます。

次号以降の美術館だよりでは、「青手」古九谷、春日山窯、吉田屋窯、若杉窯、宮本窯と紹介します。



《色絵鳳凰図平鉢》 古九谷

5月の行事予定

■のびのび鑑賞デー

作品について感じたこと、思ったことを、お話ししながらコレクション展を楽しめる日です。

※ただし、通常の開館日のお客様同士の会話を制限するものではありません。

日時：5月5日(月・祝)9時30分～18時
(展示室への入室は17時30分まで)

会場：2階コレクション展示室

*のびのび鑑賞デーのご利用に、特別な手続きは不要です。

■対話で！作品鑑賞会

対話をしながら、作品鑑賞を行います。作品への知識はいりません。よく見て、おしゃべりしながら、ゆっくりと美術館で過ごしてみませんか？

日時：5月5日(月・祝)14時～14時30分

*申込不要

集合場所：2階 コレクション展示室前

定員：10名程度(先着)

料金：無料

*第1月曜日はコレクション展無料観覧日

■企画展

「加賀につづいた琳派 宗雪・相説一宗達と光琳のあいだに」関連行事

※各イベント情報は本誌2頁をご参照ください。

国宝《色絵雉香炉》が出張中です！

当館で常設展示している国宝《色絵雉香炉》は、このたび大阪市立美術館で開催の「日本国宝展」へ出品のため不在となります(4月20日(日)から7月上旬まで「予定」)。雉香炉の久しぶりの「お出かけ」の機会に、ぜひ大阪へ会いに行ってみてくださいね！

出張期間中、第1展示室では重要文化財《色絵雉香炉》を展示しております。あらかじめご了承くださいませよう、お願い申し上げます。



近現代工芸(第5展示室)

海、波、うらうら

5月31日(土)～6月29日(日) 会期中無休

海を題材とした工芸作品を集めます。「海」とひとくちにいつても、水の色彩、波のかたち、魚や植物といった生き物、海にまつわる物語など、発想源は様々です。ここでは、展示作品からいくつかご紹介いたします。

田島正仁《彩釉鉢「深海」》(陶磁)は、初代徳田八十吉が古九谷の再現を試みる過程で開発した釉薬である「深厚釉」の青を重ねるとともに、作者独特の珊瑚や魚紋に由来するデザインを配置して、深海の趣を表現しています。

二塚長生《波動》(染織)は、荒天の海をあらわす褐色の地に、白い線と点の洗練された構成によって、躍動感あふれる波を表現しています。波しぶく冬の日本海を題材とした迫力ある作品です。

海の生き物をあらわした作品では、軽快な筆致でトビウオをとらえた北大路魯山人《染付波飛魚図水指》(陶磁)、波間の亀を蒔絵であらわした寺井直次《亀蒔絵煙草入》(漆芸)などを展示いたします。海の風景では、柴田是真の漆絵を折本とした《画帖》のうち、伊勢の景勝地である二見浦の風景をご覧いただきます。

また、海にまつわる物語では、海に住むといわれる架空の生き物・狸々を花器としてあらわした十一代宮崎寒雉《金銀象嵌狸々薄端》(金工)や、截金で知られる西出大三が能楽の演目「海人」を題材にとった木彫作品《木彫「あま」》を、物語の内容とともに紹介いたします。バラエティに富んだ海の表現をお楽しみいただければ幸いです。



二塚長生《波動》

令和7年度土曜講座のお知らせ(5～9月分)

令和7年度の土曜講座を5月より開講いたします。開催中の展覧会に関連したテーマや、当館学芸員が日ごろ研究しているテーマで行うものです。今回は5～9月分をお知らせします。

時間は毎回午後13時30分より15時まで。事前申し込み不要、聴講無料です。お気軽にご参加ください。
※都合により内容を変更、または中止する場合があります。最新情報は当館公式ウェブサイトでご確認ください。

月／日	テーマ	担当
5月10日	宗雪・相説展を深堀り！	中澤菜見子
5月17日	加賀蒔絵を楽しむ	野口明日香
5月24日	『宗雪・相説』昭和の研究史を探る1	村上 尚子
7月12日	魯山人といしかわ	奈良 竜一
7月19日	足立美術館コレクションから見る近代の日本画家たち	日置 樹也
7月26日	戦争と絵画	前多 武志
9月20日	歌仙絵の世界	中澤菜見子
9月27日	みんなでたのしむびじゅつかんスライドトーク ちょっとこぼれ話	西 ゆう子

「学芸室こぼれ話」連載2周目が決定！

好評につき、今年度もリレー連載「学芸室こぼれ話」を本号から開始します！
今回のテーマは、「私の仕事に欠かせないもの／こと」。こだわりの事務用品から調査道具、波乱万丈の仕事を支える流儀、はたまた休憩時間のお供など……一体どんな話が飛び出すのでしょうか。当館学芸室の面々による美術館のウラガワと、学芸員の知られざる日常をのぞいてみたいと思います。引き続きお楽しみください。

谷口 出(副館長)

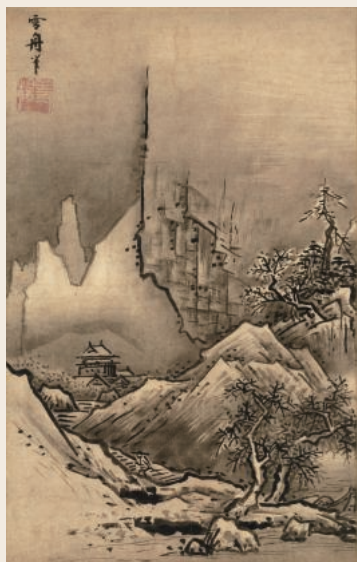
「愛用のコースター」

昭和58年、教員から異動で美術館勤務となり、教壇を離れてこれまで経験のない仕事に就いた。一日じゅう生徒と対することのない日々は、毎日が夏休みのような感覚だった。そんな折、北海道への出張を命ぜられた。教員籍で同じく手持無沙汰の同僚と二人で札幌で開かれた博物館の全国大会への参加だったが、ここで出会った全国の人たちとの交流で博物館と言いながら、歴史や自然、動物園・水族館などいろんな業種があると知らされ、美術館の仕事の奥深さ・面白さを教えられた。この仕事をやってみようという気にさせてくれたこの機会から40年。その旅の思い出に買ったコースターが、今も机上にあり、それを見るたびに当時の思い起こされる。



今年度の目玉

—令和7年度の石川県立美術館にご注目ください！



国宝《秋冬山水図》雪舟 室町時代
東京国立博物館蔵

今年度は4本の企画展をご用意しております。春から順に紹介します。

開催中の「加賀につづいた琳派 宗雪・相説—宗達と光琳のあいだに—」(4

／26～5／25)の詳細は小誌本文にゆづりますが、琳派への理解を深めていただける絶好の機会であることは間違いありません。

夏に開催の「足立美術館所蔵 横山大観と北大路魯山人展—近代日本画の名品とともに—」(7／5～8／17)では、島根県にある足立美術館が所蔵する美の巨人たちの名品をご覧いただきます。有名な同館庭園と、兼六園がコラボする関連行事も企画中です。

晩秋に開催するのは新聞報道でもご存知の「ひと、能登、アート。」(11／15～12／21)。能登半島地震、奥能登豪雨から

の復興を文化の力で応援するべく、東京

国立博物館の呼びかけで都内の美術館・博物館所蔵の多彩な作品が集結します。

「え、あの作品が」と思わず唸る名品を当館でご覧いただける貴重な機会です。本展を多くの方にご覧いただき、復興への

活力とさせていただければ幸いです。本プロジェクトは金沢21世紀美術館(12／13

／翌年3／1)、国立工芸館(12／9～翌年3／1)も会場になっています。

掉尾は「没後40年 鴨居玲展—見えないものを描く—」(2026／2／11

～3／15)です。没後40年を経てなお色褪せず、あらゆる世代を魅了し続ける鴨居玲。回顧展としては未発表の挿絵や素描なども多く展示します。

今年度も充実のラインナップで皆様のお越しをお待ちしております。

の復興を文化の力で応援するべく、東京国立博物館の呼びかけで都内の美術館・博物館所蔵の多彩な作品が集結します。

次回の展覧会

令和7年5月31日(土)
～6月29日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
歴代藩主の甲冑・陣羽織	古九谷・再興九谷
第3・4・6展示室	第5展示室
優品選・床を飾る 【近現代絵画・彫刻】	海、波、うらうら 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
5月5日は第1月曜日より
コレクション展観覧無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

5月の休館日は
26日(月)～30日(金)

石川県立美術館だより
第499号(毎月発行)
2025年5月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

Try it!

オンライン講座あり

自宅で学べるデザインスクール

デザインスクールの無料体験をお試しいただけます

デザインを学んでスキルアップ・副業・転職・独立・趣味等可能性を広げよう!!

広告

憧れの在宅ワークもできちゃう♪

子育てママ・パパも

デザインで在宅ワーク♪

大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 TEL.072-668-3275 運営/株式会社ウィット